



最後の頁を閉じた
違う私がいいた



2021・第75回 読書週間
10/27 ~ 11/9

わたしの“押し”本

書名 川のほとりの大きな木

著者名 クレイトン・バス / 訳 秋野翔一郎 / 訳

出版社 童話館出版

ご感想、おすすめポイントなどご自由にお書きください。

アフリカのリベリアを舞台とした実話を元にしたおはなし。今から36年前、1985年度の読書感想文コンクール小学校高学年の課題図書です。私が子どもの頃に読んで、心に残っている本です。ある晩、モモという少年の家に赤ちゃんを抱いた母親と老婆が、一晩だけ泊めてほしいとやってきます。モモの母親ハウはばあさまやモモの反対をよそに3人を泊めてやりましたが、翌朝目を覚ますと、母親と老婆の姿はなく、赤ちゃんが置き去りにされていました。実は、赤ちゃんは天然痘にかかっていたのです……。

天然痘が脅威だったこの時代、自分や自分の子どもの命を犠牲にするかもしれない状況で、他人の赤ちゃんの面倒をみたハウ。天然痘をめぐる人々の心の葛藤が詳細に描かれ、読者に人間の価値観や信仰心、差別の感情を問いかける、すっしり重く心に響くおはなしです。

10-12歳文も少なく児童書のジャンルに入りますが、大人にも充分に読みがえのある本です。

